

末期の眼 (冒頭部分)

川端康成／初出「文芸」(昭和8・12)

竹久夢二氏は榛名湖畔に別荘を建てるため、その夏やはり伊香保温泉に来てゐた。つい先達でも、古賀春江氏の初七日の夜、今日の婦女子に人気ある挿絵画家の品定めから、いつしか思ひ出話となり、夢二をなつかしむ言葉は熱を帯びたが、その席の画家の一人栗原信氏も云つたやうに、明治から大正のはじめへかけての風俗画家——でなければ、情調画家としては、とにかくゑらいものなのであらう。少女ばかりでなく、少青年から更に年輩の男の心をも染め、一世を風靡した点、この頃の挿絵画家は、遠く及ばぬであらう。夢二氏の描く絵も夢二氏と共に年移つて来てゐたにはちがひないが、少年の日の夢としか夢二氏を結びつけてゐない私達は、老いた夢二氏を想像しにくかつただけに、伊香保で初めて会ふ夢二氏は、思ひがけない姿であつた。

もともと夢二氏は頽敗の画家であるけれども、その頽敗が心身の老いを早めた姿は、見る眼をいたましめる。頽敗は神に通じる逆道のやうであるけれども、実はむしろ早道である。もし私が頽敗早老の大芸術家を、目のあたり見たとすれば、もつとひたむきにつらかつたであらう。こんなのは小説家に少く、日本の作家には殆どあるまい。夢二氏の場合はずっと甘く、夢二氏の歩いて来た絵の道が本筋でなかつたことを、今夢二氏は身をもつて語つてゐるといつた風の、まはりくどい印象であつた。